

2025.12  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

12号

第47巻  
No.437



ラッキョウ *Allium chinense* G.Don

(ユリ科 *Liliaceae*)

**生 薬** ガイハク（薤白） 夏の休眠期に掘取り、茎葉、ひげ根を除き、熱湯で煮てから陽干する。

**成 分** 硫黄化合物：alliin, diallylsulfide, diallyldisulfide dimethylsulfide 等。

**効 能** 胃痙攣、下痢、腰痛、冷え性、胸痛、食欲不振等に用いる。括樓薤白白酒湯、瓜呂薤白半夏湯などの漢方処方にも配合される。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



中国の揚子江流域、ヒマラヤ地方原産の多年草で、鱗茎は卵状披針形か狭卵形、鱗茎より数葉を叢生します。葉鞘は短く、葉身は線形で長く30－60cm、先は尖り、中空で1本の稜線があり、冬でも枯れることはありません。葉の断面は5稜を帯びた三角状の扁円形で、6月頃に枯れます。この頃に収穫し、夏から初秋に鱗茎を植え付けると、翌春になって繁り、数個の新鱗茎ができますが、掘らずに栽培を続けると。晩秋には40－50cmの花茎を単生し、茎頂に紫色の小さな釣鐘形の花を散形状に咲かせます。

中国原産ですが、日本には平安時代に渡来したようで『本草和名』(918)や『和名抄』(931－937)に「薤 和名於保美良」の名で収載されています。同時期の『延喜式』(927)の「典薬寮 元日御薬」の中に「薤白甘茎」の名があるところから薬用として利用されたと思われます。「ラッキョウ」の名は『本朝食鑑』(1692)に「薤 於保仁良と訓す。…羅津岐奥と称す」とあり、日本の本草書では初めて「らつきよ」の名が使われました。次いで『和爾雅』(1694)でも「薤 言は辣薑也」とルビが振られています。後の『成形図説』(1804)に「良通伎夜字 唐音辣韭の訛なり。今漬人、辣韭の字とラッキウと呼べり」と語源が説明されています。以降漢名は「薤」、和名は「ラッキョウ」になりました。

この頃から盛んに古文献に顔を出すようになります。恐らく塩漬け、味噌漬け、酢漬けなどの貯蔵技術が上がり、保存が効くようになって食用の需要が増えたためと考えられます。盛んに栽培も行われ、『農業全書』(1696)、「薤、是を火葱とも云う。味少し辛く、さのみ臭からず。功能ある物にて、人を補い温め、または学問する人つねに是を食すれば、神に通じ魂魄を安ずる物なり。うゆる地、白沙の軟らかなる肥地を二、三遍も耕しこなし、二、三月分けて一科に四、五本づつうゆべし。さいさい中うちし、根の廻りをかきさらへ、畦中をきれいにしてをくべし。湿気をつよきをにくむ物なり。是もわけぎのごとく分けてとるべし。根を塩醬に漬けき用ゆべし。又煮て食し、或いは糟に漬け、醋に浸し、又少しゆびき醋と醬油に漬けたるは久しく損せず、味よき物なり。又は醋味噌にて食す。牙音ありて気味おもしろき物なり」と栽培法と保存法、調理法を記しています。また『大和本草』(1709)では「薤 国俗ラツケウと云う物也」と、『用薬須知』(1726)には「薤 ラツキヤウ 薤白ラツキヤウの白根」と、また『千金方薬註』(1778)は「薤 薤菜なり。…薤、肥前、長崎、筑前、福岡多く種ゆ」と、産地についての記載があります。

漢名の「薤」は『爾雅』(BC200頃)に「薤、山韭。茗、山葱。薤、山薑。蒿、山蒜。注今山中多有此菜」とあり、「薑」について後の李時珍(1518－1593)は「薤の本来の文字は薑と書き、韭の類だ」と言っていることから、紀元前からラッキョウが用いられていたことが分かります。

『神農本草経』(2C－3C)には「薤は、金瘡、瘡敗を治す。身を軽く薤し、飢えず、老に耐へる」と、また『名医別録』(502～536)「薤、味辛、苦、温、毒なし。歸骨。菜芝なり。寒熱を除き、水気を去る。中を温め、結を散ず。病人、緒瘡を利す。中風、寒水腫、之を塗るを以て主る。魯山平澤に生ず」と薬の歴史も古いもので、『図経本草』(1062)には「薤は所々にある。春、秋分に蒔き、冬になると葉が枯れる。爾雅に薤は山薑(薤)なりとあるは山中に生えるもので、茎、葉は家薤と相類しているが、根がやや長く、葉がやや太く、あだかも鹿葱(チョウセンシユロソウ *Veratrum nigrum*) のようで、體、性もやはり家薤と同じである。今は一般に用いることが少だ」と『爾雅』に記載されていることを述べています。(村上守一 記)